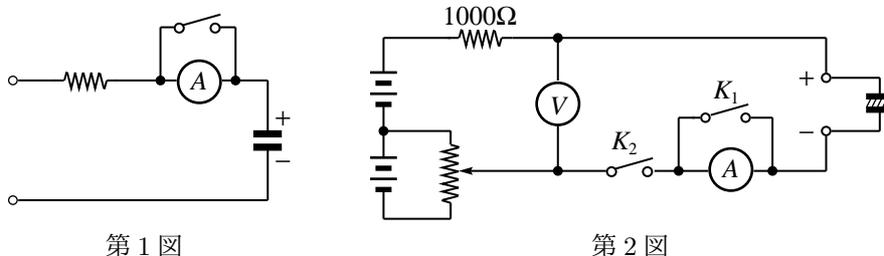


電解蓄電器の簡易検査法

静電容量は交流ブリッジによって測るが、絶縁はオーム計によっても大体見当がつけられるが、第1図のような回路に既知電圧を加えて、その時の漏洩電流を測り、その良否をきめた方が確実である。



第1図

第2図

放送協会の認定規格によれば、摂氏20度における漏洩電流は第1表の電流以下となっているから、これより良否を判断する。

第1表

最大使用電圧	1 μ F 当りの漏洩電流
100V 未満	0.0025mA
300V 未満	0.08mA
300V 以上	0.15mA

その測定法は第2図において K_1 , K_2 を閉じ電圧計 V の読みを定格最大使用電圧に保ち、3分後において K_1 を開き室温に於ける漏洩電流 I を電流計 A により測り、摂氏20度に対する漏洩電流 I_0 を次式によって求める。

$$I_0 = kI$$

第2表

°C	8	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34
k	1.65	1.52	1.41	1.30	1.20	1.10	1.00	0.92	0.84	0.77	0.70	0.64	0.58	0.52

第2表は各温度に対する k の値を示したものである。漏洩電流の多くなったものは定格使用電圧を適当な時間加えることにより復活するものもあり、また未使用のものも長期に渉る保存中に漏洩電流が増してくるものがあるから時々電圧を加えてやることも不良を未然に防ぐ一方法である。

しかしこの蓄電器は化学的作用を伴うものであるからその修理は困難である。

PDF化にあたって

本PDFは、

『ラジオ技術教科書』下巻（1947年5月発行、日本放送出版協会）

を元に作成したものである。

PDF化にあたって、旧漢字は新漢字に、仮名遣いは新仮名遣いに変更した。

ラジオ関係の古典的な書籍及び雑誌のいくつかを

ラジオ温故知新(<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/index.html>)

に、

ラジオの回路図を

ラジオ回路図博物館 (<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/radio/radio-circuit.html>)

に収録してある。参考にしてほしい。